

2016年12月11日 礼拝メッセージ

聖書：イザヤ書 60 章 1～13 節

聖書：起きよ。光を放て。

## 1 預言者イザヤの時代

### 1) 明日殺されるかもしれない

今からおよそ三千年前のことですが、ダビデはイスラエルを一つの国にまとめます。けれども、やがてイスラエルは北と南に分裂してしまい、北王国は当時の大国であったアッシリヤに滅ぼされ、次の標的として当然南王国ユダに狙いを定めます。それが明日なのか、一年後なのか、だれにもわかりません。もし、敵が襲ってきたならいのちはありません。たとえ生き延びられたとしてもすべてを失うでしょう。そうなると、どうやって明日に希望を持つことができるでしょうか。明日死ぬかもしれないのに、正しいこととか、公平なこととか、そんなことに何の意味があるのか。今日楽しければそれでいいじゃないか。そんな雰囲気が国中に広がっていきます。

そんなとき、いまからおよそ 2700 年前に南王国ユダに現れたのがイザヤという預言者でした。

### 2) やみが地をおおうような時代

2700 年も前の話と聞くと、今の自分と関係がないように思われるかもしれませんが。でもよく見ると、なんだか今私たちが生きているこの時代に似ているところがあります。私の親の世代は、戦争の混乱を乗り越えて、将来はもっと良くなると信じてがんばって働いていたように思います。実際、暮らしがどんどん便利になっていきました。炊事はおっぱら薪を燃やしていたのが、ガスコンロが入って来て台所の風景はがらりと変わりました。

家の居間には白黒テレビが置かれ、やがてカラーテレビにとって代わりました。鉄道と言えば蒸気機関車だったのがやがて新幹線になりました。高度成長期でしたからどこも人手不足。だれもが正規雇用で就職でき、結婚し、家を持ち、子どもを育てることができると信じられた時代でした。

ところがいまは大きく変わってしまいました。物はあふれていますが幸せだと思えません。就職したいと思ってもむずかしい。運良く就職できたとしても、賃金が安くて最低限の生活さえできない人たちもいます。

.12. 「勝ち組」と呼ばれるごく一部の人は何の不自由もなく暮らしている一方で、残された「負け組」はどんどん生活のレベルが悪くなるばかり。多くの人は不満をかかえています。その不満はやがて外に向かって吐き出されます。だれかを悪者に仕立て上げ、激しく攻撃します。だれかが、障がい者は生きるべきではないと叫ぶと、「そうだ、そうだ」という声があちこちから上がります。以前なら、そのようなことは言うてはならないと暗黙のルールがあったのに、すっかり変わってしまいました。ある人は「底が抜けた」と表現しています。何かこの世の中が暗い方向に向かっているのではないかと、多くの人たちは不安を抱き、希望も光もなくなっています。

イザヤは 2 節前半で言っています。「見よ。やみが地をおおい、暗やみが諸国の民をおおっている。」

## 2 主の栄光が輝いている

### 1) だれが悪いのか

いったいこの暗やみはどこから来たのでしょうか。イザヤの時代で言えば、諸悪の根源は南王国に襲いかかろうとしているアッシリヤにあるように見えました。

ではイザヤはなんとやったか。どこを読んでもアッシリヤが悪いとは書いていない。その代わりにこう語ります。59章13節。「私たちは、そむいて、主を否み、私たちの神に従うことをやめ、しいたげと反逆を語り、心に偽りのことばを抱いて、つぶやいている。」

あなたがたがいま暗やみの中に置かれているのは、自分以外のだれか悪い奴がいてすべてそいつが原因である、と言いません。問題はあなた自身にある、と指摘しました。主に従わなかったから、あなたがたは光を失い、暗やみの中をさまようことになった。

いまのこの時代、このように希望を持ちにくくなった理由についていろいろな事を言っています。国の政治が悪い。教育が悪い。最近では、「移民や外国人が悪い」という人もいます。いろいろな声があるけれど、共通点がある。全部、悪いのは自分以外のだれかです。

### 2) あなたの罪が問題である

けれども聖書は違う。悪いのは他の誰かではなく、あなたである。あなたに責任がある。そう指摘します。どう思われるでしょうか。反論されるはずですが、こちらがひどい目に遭っているのに、なぜ自分の責任だと言われなければならないのか。納得いかない。気持ちちはわかります。私もかつてそう思っていました。

でもイエスが語ったことばを思い出していただきたい。「なぜあなたは、兄弟の目の

中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。」(マタイ7章3節)

ほかの人の欠点は、はっきりと見えています。なので、すべての問題は自分以外のだれかであると思いたくなります。でも実は自分の方に大きな問題がある。ただあなたはそれを見ようとしていないだけである。まず自分をふり返りなさい。そう教えています。

### 3) あなたの上には

そう言われてもお疑問があります。「それは確かに自分だけが正しいとは思っていませんよ。悪いところも少々ある。そのことは認める。だから自分をふり返って反省する事も必要でしょう。でも、それをしたから何か変わるのか。それで世界が良くなるとはとても思えない。」そんな疑問が湧いていきます。

答えは2節後半にあります。「しかし、あなたの上には主が輝き、その栄光があなたの上に現れる。」

次第に周りが暗やみに包まれて将来に不安を感じるようなとき、だれでも光を探します。光の見えるところに暗やみの出口があるからです。ではその光はどこにあるのか。みんな探しています。でも見つかりません。いったいどこを探せばよいのでしょうか。そもそも光などないというのか。希望がないというのか。もし光がないというのなら聖書は書かれなかったでしょう。光があるから私たちに聖書が与えられています。ではその希望の光はどこにあるのか。聖書をよく読んでください。「すでに私たちの上で輝いている」と言っています。そんなに間近に光があるのなら、どうして私たちに見えなかったのでしょ

うか。理由は簡単です。みなさんはほかの所を探していたからです。光はどこか遠くにあると思っていました。でも実は、自分のすぐそばにあったのです。

そんなにすぐそばにありながら、どうしてわからなかったのでしょうか。先ほど言いました。人の欠点ばかりを見ていたからです。あいつが悪い。私は被害者だと思い、自分のことを見ていなかったから。だから光も見えなかったのです。

聖書ははっきりと言います。この世界が暗やみとなったのは、あなたの罪に原因がある。あなたが人を憎み、人を赦さず、ほかの人を蹴落とし、自分だけがよいと思い、神を神とせず、自分を神としているからこうなった。それが暗やみの原因である。光を見たいと思うならここから出発することになります。

自分の弱さを見る事は簡単ではありません。はっきり言ってつらいことです。でも、光を見たいと願うなら、どうしてもこの道を通るしかありません。もっと楽な道はないのでしょうか。なぜこの道しかないのでしょうか。

### 3 キリストの所へ向かった東方の博士たち

#### 1) キリストはどこに来られたのか

いったい私たちの救い主はどこに来られたのでしょうか。クリスマスのとき、主はきれいなベッドの上に寝かせられていましたか。いいえ。馬小屋に置かれた飼料おけの中です。自分の子どもをそんなところに寝かせたいと思う親はいますか。いないでしょう。でも主はそこに寝かせられました。汚くてくさくて、顔をしかめるような所に主は来られたのです。自分の汚い罪を進んで見ようとする人は、ほとんど限りありません。むしろ多くの

人はふたをして見ないようにしています。しかし、キリストが真っ先に私たちの罪という暗やみの中に来てくださったのです。そこに主がおられるのです。主にお会いしたいと思うのなら、どこを見るのか。汚いところを見るしかありません。だからこの道を通ります。

#### 2) 世の光となっていく

そんなことをして何かが変わるのでしょうか。聖書は変わると言います。どのように変わるのか。3節。「国々はあなたの光のうちに歩み、王たちはあなたの輝きに照らされて歩む。」

自分の信仰が国を治める政治家に影響を与えることがある。そんなことを考えたこともなかったでしょう。しかし、もし私たちが自分をふり返り自らの罪を悔いていけば、何が起こるか。主はその人の中で光り輝いてくださる。その光を見て世の王たちはこぞってやってくる、と言うのです。

今日の箇所にはろいろな地名が挙げられているのにお気づきでしょう。これらはすべてイスラエルの周りであった地域の名前で、南から東、北の順に並べられています。あなたは今は小さな国に過ぎないけれど、後にあなたのところには多くの国々がささげ物を持ってやって来る。私たちが与える影響力とはそれほど大きいのだということです。

#### 3) 金と乳香を携えて

最後に確認します。イザヤのことばはこのあとどうなったのでしょうか。本当に実現したのでしょうか。もしも、ここに書かれている事が一つも実現しなかったというのなら、わざわざ読む価値はありません。もちろんすべての事が全部実現したわけではありません。

なお将来に残されているところがあります。  
でもすでに成就したところもあります。

6 節に目を留めます。「らくだの大群、ミデヤンとエファの若いラクダが、あなたのところ押し寄せる。これらシェバから来るものはみな、金と乳香を携えて来て、主の奇しいみわざを宣べ伝える。」

「あなた」は、主イエス・キリストのことです。その方の所へ金と乳香を携えて来た人たちがいました。ルカ 2 章 11 節にあります。

「(三人の博士たちは) その家に入って、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。」

三人の博士たちはイスラエル人ではありません。外国人です。彼らは真つ暗闇の時代にずっと光を探していました。あるとき、とうとう救い主の上に輝く光の星を見つけ出し、喜び勇んで遠く離れたところからわざわざ尋ねて行きました。

いま、自分は真つ暗闇の中にいる、という方もいらっしゃるかもしれません。光が見えず苦しんでいる方もおられるでしょう。大丈夫です。主は私たちのすぐそばにおられます。私たちの最も弱いところに立っておられます。その方に目を留めたいと願います。何が起こるでしょう。この方が私たちの罪の所から光が輝きだします。その光を見て世の人たちが喜びだします。いますぐではないかもしれませんが、でもやがてそのような時がやって来る。だから今、主の再臨を待ちなさいと語ってくださいます。